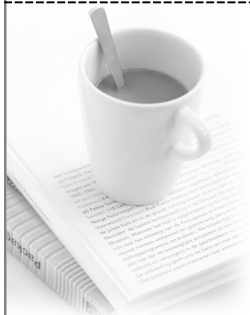


コーヒーブレイク



筆者（前列中央）と好角家の仲間たち

今こそ大相撲を熱く見る。

会員

平澤 慎一<43期>

大相撲が大好きだ。三度の飯より好きかは微妙だが、幼少期から大好きであった。子供の頃、場所中は夕方になるとテレビで相撲観戦。輪島、貴ノ花、琴桜、北の湖、旭国、三重ノ海、高見山、長谷川、富士桜、栃東、鷲羽山などなど、魅力的な力士が熱戦を繰り広げる。土俵は真剣勝負なのに、観衆は枱席で酔っぱらってるというその落差。徳利やビール瓶が触れあう音、呼出の節回し、制限時間前の盛り上がり、行司の「待ったなし」の声、勝負が決まったときのどよめき、ふれ太鼓・はね太鼓。神風さんや玉の海さんといった名解説者や北出アナウンサーらの名調子。これらの独特の雰囲気子供心に魅力的であった。そして強い力士への憧れ。当時で言えば現理事長の横綱北の湖で、ふてぶてしいほどの強さに惹かれた。そのころは夕飯の支度時、どこの家でも相撲を見ていたような気がする。

それから30年以上経った。だんだんとリアルタイムで相撲を見ることはなくなっていき、今では、夜中の録画番組で見るのが関の山である。それでもずっと大相撲の魅力にとりつかれている。

その大相撲が八百長騒動、朝青龍サッカー事件など、こここのところ世間を賑わしている。人気低迷の大相撲がこれほど注目されるのは久しぶりだが、土俵の中身以外の興味本位な話題も多く、好角家としては寂しい。そして特に「横綱の品格」について世の中の考え方が変わってきているようで、がっかりしている。

朝青龍サッカー事件はちょっと論外なので置いてお

くが、昨年九州場所の朝青龍が稀勢の里に蹴手繰りで勝った一番や、今年春場所の千秋楽で朝青龍や白鵬が相次いで立ち会い一瞬の変化で勝った取組を見て本当に唖然としてしまった。みっともないし、熱戦を期待するファンを馬鹿にしたものである。これらの問題は、すぐに「朝青龍いじめ」とか「外国人に排他的」という批判を招くが、そうではない。「横綱」という地位への畏敬の問題である。横綱は品格・力量とも抜群な力士に対する名誉称号であり、その地位の重みは大関とは格段に違う。「横綱相撲」という言葉があるとおり、勝てば何でもいいというわけではない。昔の解説の玉の海さんが横綱の蹴手繰りを見たら、怒ってしまっただけでしばらく口をきいてくれないだろう。ところが、今のテレビの解説者はこれも1つの作戦のうちというような調子で誰も批判しないのだ。とても嘆かわしい。

おっと、熱く語りすぎてしまった。「リブラ」で怒っても、意味はなかったんだ。でもこういう話をしだすと止まらないのが好角家です。大目に見て下さい。

まあ、いろいろあるけど、要するに充実した土俵で手に汗握る相撲が見たいということに尽きる。最近、元気で個性的な若手力士が伸びてきている。熱戦も多い。久々に本場所に行きたくなってきた。鍛え抜かれた力士のぶつかり合いを、ビールを飲み、やきとりをぼおぼりながら生で観戦する。本場所はテレビとまた違って美しい。その雰囲気酔いながら、力士や取組について仲間と無責任な会話を交わす。そういうのが好角家である私の至上の楽しみである。